

特別対談

“がんマネジメントと文化芸術のチカラ”

不老庵亭主 早川良一氏 × UDXヒラハタクリニック院長 平畑徹幸氏

代替医療の可能性と文化芸術にふれるライフスタイル、という一見無関係に思われるふたつの要素により、
これからの時代の健康を考える。新感覚の健康シリーズ第二弾。類まれな審美眼で和プレミアムな世界を作り出す不老庵亭主、
早川良一氏ががん遺伝子診断治療に取り組むUDXヒラハタクリニック平畑徹幸院長に聞く。

SHPremium / 文 小川よしのぶ / 写真
Photographs by Yoshinobu Ogawa Text by SH Premium

早川 先生はがん治療に新しい手法を取り入れられていますが、まずは簡単に今のがん治療と遺伝子診断と治療の可能性についてお話しいただけますか？

平畑 今のがんの診断はがん細胞が見つかるのがんって診断されるんですよ。がん保険を出すにはがんと診断されなければならず、がんと診断される根拠はがん細胞があるということなんです。たとえばこういうケース。がんはあるに違いない。でも腹水

をぬいてもがん細胞が出てこない。これでは診断ができない。直接がん細胞に針を刺せばいいんですが、それはリスクが高いので誰も手を出していない。

早川 なるほど。

平畑 今の医学にはそういうジレンマがあるんです。遺伝子学にいる自分としては違和感があります。がん細胞はひとつの結果でありタンパクの世界。タンパクの世界を私たちがつくっているのはRNAの世界。RNA

の世界をつくっているのがDNAの世界。こういうなぐれを見てみると、当然タンパクの大本を見つければがんとして簡単に診断ができる。それは血液を見ることでがんの分子がわかるんです。これは世界中で常識です。しかしそこに日本はなかなか入ってこようとしません。細胞レベルの診断に固執しているのが現代医学の問題点だと思います。

早川 なぜそうなるのですか？

平畑 日本に方法論がないんです。遺伝子

診断の誰もが認める方法異論がない。たとえば韓国だと私が教わっているウー・チュエル・ムーン先生(注)はそれが確立しているわけです。95%以上の診断の正確さというのがそれを日本でこれからご紹介しているということなんです。

早川 がんの治療に長く携わっておられるわけですが、今のお話をきいていると、予防の方にウエイトを置かれているのですか？

平畑 いいえ。そうではなく、がんができる前に消し去れば超早期発見、超早期治療にもなります。

早川 予防に軸足があったとしても、治療にもつながってくると。

平畑 そういうことです。細胞にこだわっている限り細胞を見つけないとがんを診断できない。たとえばCTやMRIで5ミリの

がんをみつけた。そのときにはもう10の9乗個のがん細胞が集まっているんです。それまでには10年から20年の歳月が流れているんです。そのあいだは何もしないのか。そこにこそ遺伝子医学が必要なんです。

早川 先生はつまり、予防レベルで画期的なことをされているわけですね。

平畑 今の早期発見はがんの小さな塊を見つけておくことですけれども、我々にはもっと10年も15年も前にかん遺伝子を見つけてがん遺伝子を消し去る技術があります。

早川 見つけることもできるし、消すこともできる、と。

平畑 そうです。そうすればがん細胞が形になる前に消し去ることができるわけです。

早川 世界でまだがんの診断はそこまで踏み込んでいないのですか？

平畑 国や医療機関によってさまざまです。方法論として確立されておらず実用段階にいたっていない。それが問題です。

早川 日本では先生がこの分野の先覚者であられるのですね。

平畑 いやいや、日本にも偉い先生方がたくさんおられます。しかしほとんどは研究者でいらっしゃる。私は数少ない実践者の一人だと思っています。

早川 遺伝子レベル治療の方法論はできたけど、実用実践に関してはまだ第一歩ということですか。

平畑 大学研究が実用段階に降りてくる時間を待てないんです。実践で使いたい。そういうことができる医学が日本にない。だから韓国のウー先生の技術に出会い、これだと思ったんです。すぐに韓国に会いに

くらい有効なのですか？

平畑 それはその後のライフスタイルによります。不規則な生活をしたり、カラダに無理をかけないことです。

早川 先生は西洋医学の文脈の中で画期的な戦術をとりいれられた。これは大きな差別化ですね。しかしがんというものに対して抑止するためのひとつのプロセスだと思うんです。発病する前も生命現象は繋がっているわけです。がんというのは生命活動の停滞、危機ですよ。

平畑 がんは老化のひとつの現象と考えています。昔はがんになる前に死んでいましたが、今は精神状態、衛生状態がよくなってきて変わりました。

早川 生命活動の停滞が、がんという現象によって発現している。生命活動が何に

よって活性化し何によって破綻するのか、私はそこに興味があるんです。そういうものを取り入れた医学の思想はまだあるようではないですね。

平畑 生老病死。必ずしななきいけない。何で死ぬか、死に方を選ばなきゃいけない。生命を使い切って死ぬという責任がありますからね。

早川 それぞれ、その人の人生観、死生観があると思うのですが、私はもっともっとポジティブにがんという現象を通じて人間の生命の本質に迫っていく必要があると考えているんですよ。西洋医学を肯定していますが、そこだけでは解決しない。

平畑 そうですね。

早川 私の営みを象徴して不老庵という庵を結んだわけですが、実は不老とい

う言葉にもひっかかりがあります。何かエイジングという言葉がいけないことのように聞こえる。私はそうでなくて、よく老いてよく死ぬ、というんでしょうか。死を否定する必要もなければ老いを否定する必要もない。いかによく病むか。病むことも老いることも死ぬことも、私は自然の摂理だと思っているんです。

平畑 それは興味深いお考えですね。

早川 私は病むことも老いることも、死ぬことですら、そこに大きなストレスを持っていないですね。もしかしたらがんが発見されるかもしれませんが、がんを無下に否定する必要もないのではないかと、というくらいに考えているんですよ。そのストレスからの開放が実際のところはがんの予防や治療になるのかもしれない、と。言葉にす

「われわれにはもっと10年も15年も前にかん遺伝子を見つけてがん遺伝子を消し去る技術があるのです」平畑

行って。その時点で60何人の患者さんが治療を受けていてかなり多くの人たちが救われていますので。

早川 韓国ではウー先生に救われた患者さんが多いのですか？

平畑 多いですね。今はアメリカ人の患者さんが多いようですが。アメリカはがん難民が多いんですよ。とくに治療にお金がかかりますので、ある一定の治療が終わると放り出されてしまうんです。たまたまウー先生の話聞いて韓国に押し寄せてくる。ウェイトिंगリスト100数十名いる。そこに来られる方が10名ずつ私のところに来られます。その10名のほとんどが4期の人たちです。

早川 4期というのは？

平畑 もうすでにがんがあちこちに転移し

ているレベルです。ふつうだと後は死を待つしかない。アメリカではこういうまとまった治療を受けることができないんです。DNAワクチン、サイトカイン、樹状細胞・NK細胞、それからがん抑制遺伝子、という4つの方法を提供できる医療機関がない。治療に来られた方々の8割方が治っています。

早川 8割というのはすごい数字ですね。がん細胞が発見されると、そこから治療なのですか？

平畑 予防と治療、2通りの遺伝子医学の使い方があります。

早川 どちらも本質的には同じことをやるんですか？

平畑 同じことをやりますが治療の方が複雑です。予防の世界では96項目のがん遺伝子を調べて腫瘍マーカー10個で106

項目調べます。96項目のがん遺伝子のうち0-5個が良性腫瘍なんです。6-10個が前がん状態。11個以上ある方はまず活動性のがんがあると思っています。CT、MRI、PET-CTで何のがんもない、でも遺伝子診断で見たら11個以上ある。この方は活動性のがんが必ずあります。ただそういう場合は治療のやり方がないです。がんが見つからないんですから。われわれならできます。ただサイトカイン治療だけでは治らない。その場合はがん抑制遺伝子のカクテルを使います。そうするとどいたいがん細胞は消え、リセットがかり、当分がんにならないんです。そうすることでがんによって死んでいくという恐怖から開放されるのが大きい。

早川 当分ならない。そのリセットは何年

ると「がんを賜る」というんでしょうか。あまり敵外視しないという。何が予防になり何が治療になるかはさまざまなことがあると思う。私はビジネスマンですけれども、ビジネスの捕らえ方というのはいつも全部？マークがついている。物事の捕らえ方、方法論は無限にあって答えはひとつであるまい、という。たとえば去年の暮れから世界的な金融パニックが起こって世界中から何千兆円というお金が消えた。それは優秀な企業や個人が大変なヘマをした。ひとつの大きな思い込みが悲劇を生んだわけです。私はがんだけでなく人間の生老病死、全部哲学がいるように思います。そういう視野に立てば先生が取り組んでおられるのと別の意味でのがんの予防と治療が加わる。それと先生の今の戦術取り組みが車

輪の両輪となって、本当の健康につながるような気がして仕方がないんですよ。**平畑** なるほど。それはとても示唆に富んだお考えです。

早川 がんというのは人間の生命をとらえる、ある意味で象徴的な現象だと思うんです。ですからそのことと向き合うことによって、もっと生命に触れられる。私は感動=エモーションこそが生命の根源だと思っているんですよ。逆に今は人間からエモーションが消えたんで、死に体になっている、と。私は文化や芸術へのあこがれというのはひとつしかないと思います。人間の命の潤い、あるいは源ですよ。文明的な世界では目先の経済に役立たないものは排除されますね。経済を見ても近視眼的に物を見ていると、大きく揺れるとどこかで大

きなワナにはまってドジをしてしまう。人間の生命もそういうことで、どこかで大きなドジをしてしまう、そのひとつががんではないかと私は見ているんです。

平畑 われわれのように現場で治療を実践する医者からは、なかなか出て来ない発想です。とても勉強になります。確かにエモーショナルな出来事で、人が急にピンと立つ、というのでしょうか。元気になることは現場でもよく経験します。生き甲斐になるようなことをつかんだ瞬間、人間の命ってなんで尊いのだろう、と思出すのでしょうか。そこに回答を見出したい。今日は興味深いお話をありがとうございました。**早川** 私のがん治療の最前線について、大変見識を広めることができました。どうもありがとうございました。



平畑徹幸(左写真)

長崎県生まれ。東邦大学医学部卒業。第一内科、米国留学を経て渋谷でヒラハタクリニックを開業。2008年最新の遺伝子検査技術・遺伝子治療技術を用いた一般内科診療強化した、UDXヒラハタクリニックを開院。A4M(米国抗加齢学会認定医)、日本医師会認定健康スポーツ医、日本医師会認定産業医。

早川良一(聞き手)

不老庵亭主。「SEVEN HILLS」誌上で古今東西の美の様式を融合することでそこに調和が生まれる、という「和プレミアム」のコンセプトをプロデュース。独自の審美眼に基づく時空間や食の世界を提案。現在はさらに発展した新たなコンセプト、「エモーション・エイジング」を提唱し、代官山にサロンをオープン。

注)ウー・チュエル ムーン

1954年韓国生まれ。1980-85年ソウル大学泌尿器科勤務。1986年韓国中央大学泌尿器科教授。1991年米国ノースウエスト医科大学病理学。1992年米国のM. D. アンダーソンがんセンターに留学。その後現在に至るまで遺伝子診断治療にかかわる開発などに従事し、韓国政府から数々の賞を受賞。それにまつわる特許を有し世界トップの技術をもつ。現在M. D. アンダーソンやメイヨークリニックから共同研究や開発の以来を受けている

問い合わせ情報

UDXシラハタクリニックのがん遺伝子診断・治療を受診し、また文化芸術にふれることで感動する。ふたつの方向で、完全な元気を手に入れる大人の健康クラブ「ハッピーエイジング倶楽部」がスタートします。詳しい内容はお問い合わせください。
お問い合わせ ブルーオーシャンTEL 03-5379-7321